慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	現代日本語における格助詞「で」と「から」の比較 : 本質的機能の仮説と制約の説明
Sub Title	Étude comparative de DE et KARA en japonais contemporain : hypothèse et contraintes
Author	芦野, 文武(Ashino, Fumitake) 伊藤, 達也(Itō, Tatsuya)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2020
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.118, (2020. 6) ,p.150 (93)- 164 (79)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-01180001-0150

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

現代日本語における格助詞「で」と「から」の比較
—本質的機能の仮説と制約の説明—

芦野文武
伊藤達也

1. 導入

本稿は現代日本語における格助詞「で」と「から」について，発話述定操作理論の立場から[1]，それぞれの格助詞の本質的機能の仮説を提案し，制約の分布を基に両者の意味の相違を明らかにすることを目的とする。

「で」と「から」は両者とも多義的な格助詞であり，今まで多くの先行研究の対象となっている。とりわけ，森田（1989），菅井（2004; 2007），盤若（2015）は，それぞれの多様な意味・用法を記述するための包括的な仮説を提示している[2]。本稿は，格助詞の多義性を意味のヴァリエーションとして捉え，言表内の個々の意味は，個別的意味を超越した意味的同一性と文脈との相互作用を通じて構築されるという立場をとる[3]。

格助詞の「で」と「から」は以下の用法で競合関係に入る（用法の名前・区別は日本記述文法研究会編[4]（2009）に基づく）。

①「原因」　たばこの火の不始末{で／から}火事になった。（森田1989）
②「判断の根拠」隣の部屋の人物が誰なのか，甲高い声{で／から}分かった。（日文研2009）
③「材料」　ペットボトル{で／から}服を作る。
④「構成要素」　国会は衆議院と参議院{で／から}成り立っている。（日文研2009）

⑤「動きの主体」私の方{で／から}それを担当の者に伝えておきます。（日文研2009）

本稿ではこれら5用法における格助詞「で」と「から」の分布の違いを手掛かりに分析を進めることにする。以下「で」と「から」の仮説を提出する。

2. 仮説

格助詞「で」・「から」が標示するタームをX, 述語をpとし,「で」と「から」の仮説を以下のように提案する。

・「で」: Xは, pが表す事象の実現を「媒介」する。（cf. 芦野・伊藤2019）
・「から」: Xは, pが表す事象を含む連鎖の「起点」となる。Xとpの間には他性（altérité）の関係が成り立つ。

以下この仮説に補足的なコメントを加える。
－Xが, pの補語であるガ格, ヲ格, ニ格で標示される名詞句と関係づけられる場合はそれをYと表記する。（cf.「国会（＝Y）は衆議院と参議院（＝X）でできている」,「ペットボトル（＝X）で服（＝Y）を作る」,「私の方（＝X）からそれを担当の者（＝Y）に伝えておきます。」
－「で」の仮説における「媒介」は, pで表される事象の実現において「利用される・関与する」ものという広い意味に定義しておく。「媒介」が文脈によって様々な解釈を受けることにより「で」の多義性が生ずる。（cf. 芦野・伊藤2019）
－「から」の仮説における「連鎖」は, 文脈によって,「局面」,「推論の過程」,「変化のプロセス」,「伝達のプロセス」など様々な解釈を受ける。
－「から」の仮説における, XとP（もしくはY）の間の「他性」とは, その間の「質的差異」,「時間的差異」,「空間的距離」など, 文脈によって様々に解釈されうる。

以上の仮説に基づき, ①～⑤までの用例を検討していく。

3.「原因」を表す「で」と「から」

「で」と「から」の間には次のような制約の違いが観察される。

（1）　たばこの火の不始末{で／から}火事になった。（日文研2009）
（2）　原爆{で／*から}街が灰になった。
（3）　太郎と花子は, つまらないこと{で／?から}もめている。

「原因」とは,「ある物事や状態を引き起こしたもとになった事・出来事。」（『大辞泉 第3版』）と定義される。したがって, Xがpをどのように引き起こすかに関して「で」と「から」は異なることになる。以下, XとpのXの関係がどのように構築されるかを元に両者の違いを記述する。

既に見たように,「で」はXを, pで表される事態の実現の「媒介」（「利用されるもの」）と定義した。つまり「で」はXをある意味で「道具化」していると言える。したがって「道具化」されたXは, pで表される事態とは切り離すことができず密接に関わっているということになる[5]。

それに対して「から」は, Xを, pで表される局面とは異なる局面として定義すると考えられる。Xは「起点」として, pで表される局面を含む連鎖の最初の局面と解釈されるため, XとpXで表される局面の間に「他性」が存在すると考えられる。このpとXの間の他性こそが,「から」が表す「原因」に,「遠因」（cf.山田（2003））や「遠隔性」（cf.菅井（2008））といった解釈を与えると考えられる。

（1）においては,「から」はX（「たばこの火の不始末」）を, 述語p（「火事になった」）を「最終局面」とする一連の出来事の連鎖（消えていなかったタバコの火が周りに燃え移って火事に至るプロセス）の「最初の局面」として導入している。重要なのは,「から」がX（「火の不始末」）とp（「火事になった」）を別々の局面として捉えているということである（cf.「他性」）。逆に「で」が使われた場合は, Xはpに関与する「媒介」に過ぎず, pは「から」で表されるような一連の事態の展開の最終局面とは理解されない。もちろん, 解釈上は, XとpXの間には時間の経過があることは確かだが,「で」はそれを考慮せず, Xが1つの事態として捉えられたpの参与者であることのみをマークすると考えられる。

（2）で「から」が不可能なのは, X（「原爆」）とp（「街が灰になった」）の間に

「他性」を認めることが困難であるからである。ここでは, Xはpと切り離せず, いわばXがpの「直接的原因」となってしまっているため,「で」しか使えない[6]。

(3) では「から」は不自然であると感じられる。それはp(「太郎と花子はもめている」)に含まれる進行相の「ている」が, 眼の前で起こっている事態を記述しており, Xとpの間に他性が想定できないためであると考えられる。なお,「から」の使用は, (4) のような述語の調整を経ることではじめて可能になる。「生じる」という動詞が「新たな局面」の出現を意味するため, Xをpに対して他性のある局面として把握することが可能になるからである。

(4) つまらないこと{で/から}, もめごとが生じてしまった。

ところで, この例文においては,「から」と「で」は両方可能であるが, Xに当たる「つまらないこと」のステータスはどちらの格助詞を用いるかによって異なる。「で」はXを, pの生起を媒介するような出来事, つまりpで表される深刻な事態が生起するのに充分であるような出来事として規定する。この例文では, Xの語彙的性質により「そんな取るに足らないことにも拘わらず, もめごとが生じてしまった」というようなある種の「譲歩的」な解釈をももたらす。次のような例も同じように分析できる。

(5) 太郎は恐怖心が強く, ちょっとしたことですぐ驚いてしまう。
(6) 信頼関係は, ちょっとしたことで崩れるものだ。

一方「から」は, Xを, pで表される深刻な状況に至るプロセスの起点として規定する。つまり,「から」は小さなことがだんだんと深刻な状況へと展開していく端緒として捉えられるのである。この意味で, 連鎖として捉えられた複数の局面の中で, Xは最初の局面であり, それがpで表される別の局面へと繋がっていくということになる[7]。

このpで表される「別の局面」は, 以下の2つの例が示しているように, しばしば連鎖の「途中の局面」であり,「最終局面」は別のpによって表されることもある。

（7）　あるときこの国と隣の国とは戦いを始めました。そしてちょっとしたことから，この国は隣の国の兵士に攻め込まれることになり，いつしか宮殿は幾重にも，隣の国の兵士によってとり囲まれてしまいました。（https://www.aozora.gr.jp/）

（8）　ところが，その喜びの真っ最中に，ヘンデル先生は，ふとした不注意から，黴菌が目に入り，それがもとで，死んでしまいました。（https://www.aozora.gr.jp/）

4.「判断の根拠」を表す「で」と「から」

森田（1989 : 763-764）は，「現場に残された指紋（で／から）足がついた」という例について，「から」は「推論の起点（＝「指紋」）」が「から」によって示され，それによって推論の過程が表出される」のに対して，「で」は単なる「理由説明」であるという興味深い指摘をしている。これを本稿の枠組みから言い換えれば「から」は，Xを，判断を表すpが終点となるような連鎖の出発点（推論過程の第一段階）として提示し，Xがどのように最終的な判断に至ったか，という推論のプロセスに焦点を当てると言える。したがって，「から」を用いた場合は，先ほどの「原因」の用法で見たように，X（根拠）とp（判断）の間にいくつかの段階が存在するという意味で，「他性」が存在するといえる。他方，「で」はある意味で，既に与えられた判断（p）に関して，X（根拠）はそれがどのように実現されたのかを「後付け的に」説明するものとして機能していると考えられる。

（9）　隣の部屋の人物が誰なのか，甲高い声{で／から}分かった。（日文研2009）

この例においては「で」と「から」は両方可能であるが，次のような違いがあると思われる。「から」を用いた場合は，X（「甲高い声」）は，「隣の部屋の人物が誰か」に関して，判断p（「それは花子だと分かった」）に至る推論の出発点として規定される。つまり，Xを起点として推論が始まり，様々な段階を経て，判断pに至ることが示されるのである。一方，「で」が用いられた場合は，判断p（それが花子だとわかること）がもともと与えられ，何（X）がその判断を可能にしたかを，ある意味で事後的に付加していると言えるだろう。したがって，以下のよ

うに, 判断pの内容が先に与えられ, その「判断のしかた」が後付け的に明示される場合は「で」の方がふさわしいと思われる。

（10）隣の部屋にいるのは花子にちがいない。それはあの甲高い声{で／？から}分かる。

（11）「夢じゃないよ。ダイクだよーあの叩き方{で／?から}分かるんだよ」と女房は大声で叫んで, 立ち上がり, 窓を開けて, グッと頭を突き出してみた。すると, たしかにダイクが, 壁に寄りかかって立ち上がり, こちらの顔を見上げながら, 一方の前足で下の窓ガラスを叩いていた。（『ある羊飼いの一生』, W. H. ハドスン, 水嶋正路訳, グーテンベルグ21 https://books.google.co.jp/）

上記の例は,「分かる」という動詞によって, 既に述定関係「AはBである」が確定したものとして捉えられているが（cf.「隣の部屋の人物は花子である」,「窓ガラスを叩いているのはダイクである」),「予想する」や「考える」などの動詞によって, それが「未確定」として提示されると,「から」のほうが適していると思われる。

（12） 隣の部屋の人物が誰なのか, 甲高い声{?で／から}予想してみましょう。

（9）とは異なり,（12）では,「隣の人物が誰なのか」がまだ判明していないということが重要であるように思われる。つまり, X（「甲高い声」）から出発して, まだ結論が出ていない, 当該の人物が誰であるのかを予想するという推論のプロセスを問題にしているため,「から」が使われていると考えられる[8]。

5.「材料」を表す「で」と「から」

述語pが「作る」やそれに類似する動詞によって実現され, あるモノから別のモノが生産・創造されることを意味する場合, しばしば「で」と「から」が競合する。この用法においては, 格助詞で標示されるXには「材料」と解釈される名詞句が来る。pの補語としてヲ格で標示される「生産物」に相当する名詞句をY

とする。「で」と「から」を区別する際に重要となるのが, XとYの間の語彙的性質の違いである。

（13）原油{？で／から}石油を精製する。（菅井2008 : 54）
（14）妹が毛糸{で／?から}セーターを編んだ。（*ibid.*）

これらの例について, 菅井（2008）は, XとYの間に「遠隔性」（本稿で言う「他性」）が認められる場合は「から」が用いられ, そうでない場合には「で」が使われると指摘する。（13）では,「原油」と「石油」が別々の範疇」であり,（14）では「「セーター」は同時に毛糸でもありうる」（*ibid.*）。しかしながら,（14）の「で」は少々奇妙に感じられる。それに対して, 次のような例文は自然である。

（15）{アクリルの／アデルモヘア製の／紺色の}毛糸でセーターを編む。
（16）自分で紡いだ毛糸でセーターを編む。

なぜこれらの発話は（14）よりも自然なのだろうか？芦野・伊藤（2019）では,「材料」,「道具」,「様態」などを表す場合の「Xで」を,「Xはpの実現の仕方を特定化する」ケースであると分析した。（14）-（16）の例では, Yが特定化されると考えるが, それは, XがYを質的に限定するような「特定のもの」でなければならないことを意味する。このことから考えると, 例えば,（14）でX「毛糸」が奇妙なのは,「毛糸」は「セーター」を編むことが実現するために, ア・プリオリに必須とされるからである。つまり,「毛糸」（X）だけではセーター（Y）を質的に限定できない。だからこそ, X（材料）は「アクリルの毛糸」などの「特定の毛糸」である必要があり, それによってはじめてYを「アクリル毛糸で編んだセーター」として質的に限定できるのである[9]。したがって, XとYの間に「同定関係」（cf. 菅井）があるだけでは,「で」の自然な使用が可能であるとは言えないということになる。

次のような例文についても同じような説明が可能である。

（17）酒は米{?で／から}造る。

（18）佐賀の酒は，　佐賀の米{で／?から}。（https://www.saga-s.co.jp/articles/-/225222）
（19）ルー{?で／から}カレーを作る。
（20）ククレカレーのルー{で／?から}カレーを作る。

（17）は，X（「米」）とY（「酒」）の間に質的な他性があるため，「から」を使ってXがYに変容してく生成プロセスを表すことはできるが，「で」は奇妙である。しかしながら，（18）においては，今度は「で」と「から」の容認度が逆転する。この例文で「で」が使われているのは，米が酒の「製造過程」の「起点」であるという側面よりも，「佐賀の米」という特定の米こそが，佐賀の酒を製造する材料（＝媒介）としてふさわしいという側面が強調されているからであると考えられる。つまり，米に「佐賀の」という限定がつくことで，米は酒を「地元の米で造った地酒」として特定化していると考えられる。

同様に，（19）においては，「で」は，X（「ルー」）はY（「カレー」）を特定化するのに充分でないため制約があるが，（20）のX（「ククレカレー」）のようにどのメーカーのルーを使うかを明示すれば問題がなくなる。「から」の制約は「で」のそれとは逆転する。（19）においては，「から」によってマークされていることにより，XはYの「材料」という側面よりも，カレー調理の工程の最初の段階（起点）という側面が強調され，「本格的な」カレー作りであるという解釈がされる。（20）においては常識的に「ククレカレーのルー」をそのような段階としてみなすのは難しいため「から」は奇妙であると考えられる。

さらにいくつかのケースを検討しよう。次のような例ではXの語彙的性質自体が「で」の使用を妨げていると考えられる。

（21）ゼロ{*で／から}すべてを創り出す。
（22）神は無{*で／から}天地を創造した。

これらの例で「で」が使えないのは，X（「ゼロ」，「無」）は非存在物であり，pで表される創造行為の媒介としては機能できないためであると思われる。Xはpで表される事態が実現されるにあたって存在するものである必要がある。

ただし，Xが事態の実現において存在するものでなければならないのは，XがYの「材料」と解釈される場合であり，実際次のような例においては「で」は可能

である。

（23）レシピ無しで料理を作る。

この例において, X（「レシピ」）はY（「料理」）の「材料」ではなく, Yの実現の「様態」（どのように料理を作るか）として解釈される。この例では, レシピは存在するがそれを敢えて利用しない・その場にないので利用できないということを述べていると言える。

最後に, XがYに対して「媒介」とも, 生成変化の「起点」とも解釈されうる場合は, 意味の違いはあるものの「で」と「から」が両方可能であることを指摘しておく。

（24）使用済みペットボトル{で／から}服を作る。

「で」が使われた場合, X（「使用済みペットボトル」）は, 例えば, 子供がそれを切って, テープなどで繋ぎ合わせることによっていささか奇妙な「服」（Y）を作る際の「材料」と解釈される。それに対して,「から」が使われた場合は, Yが作られるプロセス（Xが繊維としてYに生まれ変わる「生成変化」）の「起点」としてXが解釈される。この場合, XとYの間に質的な他性があることが重要である。

6.「構成要素」を表す「で」と「から」

「で」と「から」が,「成り立っている」,「構成される」,「できている」などの動詞とともに用いられ, Xが, ガ格で標示されたYの「構成要素」を表す場合[10], 以下のような制約の分布がある。

（25）国会は衆議院と参議院{で／から}成り立っている。（日文研2009）
（26）ナウル共和国はただ一つの島{で／?から}構成された国である。

（25）において,「から」は「国会が成り立つ」という生成プロセスの起点と

して「衆議院と参議院」（X）を指定している。この生成プロセスは，二つの「要素」として提示されているXが集まって，あらたな「全体」としての「国会」（Y）に変容していくプロセスである。それに対して「で」は，「から」とは逆のメカニズムを描く。つまり，「媒介」であるXが，構成要素として，Yを「構成体」として「完結[11]」させている。その意味で，「で」においてはXがpを「補完」していると言えるのである。

両者の違いをまとめると，「から」は複数の要素が集まって全体が構成されるプロセスを表現するのに対して，「で」においては，いわば「全体」がまず与えられ，それを成り立たせるのに必要な要素が「で」で標示されるということになる。

（26）において，「から」に制約があるのは，Xが「1つの島」で実現されているため，それ自体が「ナウル共和国」（Y）そのものと解釈されてしまうため（cf.「同定関係」），「ナウル共和国」が構成されるプロセスの起点として機能できないからである。

7.「動きの主体」を表す「で」と「から」

最後に，「で」と「から」が「動きの主体」を標示する場合を扱う[12]。

（27）私の方{で／から}それを担当の者に伝えておきます。

「から」を用いた場合，「伝える」という動詞の意味が重要である。「伝える」とは，主体から発信されたメッセージが別の主体に達するということであり，その意味で「方向性」を持った動詞である。従って，X（「私の方」）とニ格で標示されたY（「担当の者」）の間に「距離」（＝他性）があり，「から」は「伝える」という行為を連鎖（連絡事項がXを起点としてYに伝わるというプロセス）として捉えていると言える。

それに対して，「で」にとって重要なのは，それが標示するX（「私の方」）が「伝える」という行為を実現させる「媒介」となることである。

芦野・伊藤（2019）では，このように，「で」が「動きの主体」を表している場合，Xは，潜在的にpに関わる可能性のあるX, X'...のようなクラスから「媒介」として選択されたタームであり，そのことが「XがX'に代わってpを行う」とい

う解釈を引き起こすことがあるということから，それを「代替動作主」と名付けている。例えば，（27）では，p「伝えておく」に関与する可能性のある「媒介」のクラスが想定され（「私」，「あなた」...），その中からX「私」が選択されたことで，「私」は「あなた」その他との競合関係に置かれる。pに関与するのは（「あなた」ではなく）「私」であるため，そこから「私が太郎に代わって伝えておく」という解釈が生じると考えられる[13]。したがって，次のような例のように，Xが「代替動作主」として解釈できない場合は，「で」に制約がかかる。

（28）ねえ，花子，太郎君と付き合い始めたって聞いたんだけど。どっち{*で／から}告白したの？

（28）において，「から」は，Xが「どっち」で表されていることにより，「告白」するという行為の方向性が，「太郎が花子に告白する」と「花子が太郎に告白する」の二者択一に絞られ，起点Xが「太郎」だったのか，「花子」だったのかを問うている。

これまで見たように，「から」は 主体Xを「起点」と解釈するため，「起点」と両立するような，ア・プリオリに「方向性」（主体Xから，別のニ格で標示された主体Yへの方向性）を持つ動詞が使われていた。したがって，そうでない場合は「から」に制約がかかることが予想される。実際，「から」は，次の例にあるような「やっておく」や「できる」のようなア・プリオリにはそのような方向性の意味を持たない動詞とは共起できない。

（29）残りは私の方{で／*から}やっておきます。
（30）救急隊員が到着する前に，私たち{で／*から}できることがあります。

「で」は「方向性」がなくとも使用可能であり，Xは「代替動作主」と解釈される。ところが，pがそのような「方向性」を持たずとも「から」が使える場合が存在する。

（31）そんな話，こっちからお断りだ！
（32）こんな会社，こっちから辞めてやるよ！

これらの例では, p「お断りだ」(この場合は名詞述語),「やめてやる」は,「私から連絡します」のような場合のように, Y(対話者)にメッセージが届くというプロセスの発信者であるという意味で, Xを「起点」としてマークしているわけではない。(31)と(32)における「から」は, pというアクションを「最初に起こす」/「他(これをX'とする)に先立って起こす」という意味でXを「起点」としてマークすると言える。

(31)においては,「相手(X')が断る」と「自分(X=「こっち」)が断る」, (32)においては,「会社(X')が自分(X)を辞めさせる」と「自分(X=「こっち」)が会社(X')を辞める」の間で, どちらが主導権(イニシアティヴ)を取るかが問題となっているが, Xがpを先に遂行することが「から」によってマークされている。したがって, これらの例では, pの始動に関して, 起点Xと, 潜在的な起点X'が対立していると言える。

(31)と(32)において, Xとpの間に他性があるとすれば, それは, pはア・プリオリにX'と結びついているが, その関係の外部にあるXがpと結びつくという意味であると考えられる[14]。

次のような例も, 同様の分析が可能であると思われる。

(33) 子供が自分{で/から}勉強をやり始めた。

「から」は, pを始動させる起点としてX(「自分(=子供)」)をマークするが, Xは潜在的な起点である「親」(X')と対立する。したがって, 親が子供に「勉強しなさい」と言うことによって子供がpを始動したのではなく, 子供が「積極的に」/「進んで」pを始動したことが,「自分から」によって意味されている。「で」はX(「自分」)を, pを実現する「媒介」としてマークするため, そこから,「親の助けを借りずに独力で」という意味効果が生ずると思われる。このような「独力で」という解釈は「勉強をやる」のようなある種の困難さを伴う事態であれば可能であるが, 以下の例のようにそれが考えにくい場合は制約がある。

(34) 子供が自分{?で/から}水泳教室に通いたいと言い出した[15]。

8. 結語

本稿では, 競合関係にある5用法の中で, 格助詞「で」と「から」の使用制約を観察し, それぞれの本質的機能の違いから意味の相違を説明しようと試みた。

格助詞「で」は, 芦野・伊藤（2019）において, その仮説「Xは, pによって表わされる事象の実現を媒介する」という「で」の意味的同一性をもとに, 3つの機能に分類し網羅的に記述した。

本稿では,「から」の仮説「Xは, pが表す事象を含む連鎖の起点である。Xとpの間には他性（altérité）の関係が成り立つ。」を提案し,「で」との比較を行った。「から」の網羅的な記述は別稿に譲ることとする。

注

1 発話述定操作理論（Théorie des Opérations Prédicatives et Énonciatives）。理論的枠組みについては, Culioli（1990 ; 1999a ; 1999b ; 2018）を, 最近の発展についてはCamus（éd.）（2019）を参照。

2 「から」が「起点」を表すという仮説は多くの先行研究でコンセンサスがあるが,「で」に関しては「前景的なガ格やヲ格の背景的側面の提示」（cf. 菅井),「限定」（cf. 森田),「成立させるモノ」（cf. 盤若）など諸説ある。

3 同じ理論的立場から仏語の前置詞を記述した研究としてFranckel & Paillard（2007), Ashino, Franckel & Paillard（2017）がある。

4 以降「日文研」と略。

5 ただし, pとXの間の「密接性」にはXの語彙的性質などによって度合いの違いがみられる。例えば,「台風で屋根が飛ぶ」においては, 出来事名詞であるX（「台風（が起きること）」）とp（「屋根が飛ぶ」）が, Xがpに直接関与するという意味で密接な関係にあるが、それぞれ2つの異なる事象と解釈されるのに対して,「癖で爪を噛む」はX（「癖」）とp（「爪を噛む」）は2つの独立した事象であるとは解釈できず, ある意味でpはXの「表出」と考えられるため, 前者よりもpとXの間にはより密接な関係があると言える。後者の例は, 純粋な「原因」を表しているというよりも,「道具」を表すとされる「ナイフで肉を切る」において, X（「ナイフ」）がp「肉を切る」という行為の内部にある関係と近い。cf. 芦野・伊藤（2019）

6 同じ理由で,「癌{で／*から}死ぬ」や,「父親が溺死したこと{で／*から}彼女は変わった」のような例でも「から」の使用には強い制約がかかる。後者の例の場合,「父親が溺死したことから彼女は変わり始め, 今では全くの別人である」のよう

にp「（彼女は）変わる」を連鎖的なプロセスの途中に設定することで「から」の使用は再び可能となる。なお「父親の溺死から彼女は変わった」は可能であるが，この場合Xは「原因」というよりも，「起点」としての「時点」（＝「父親が溺死するという出来事が起こった時」）と解釈されるように思われる。

7　「原因・理由」を表す「から」が用いられる場合，共起する述語の特徴として，「生じる」，「起きる」など「発生」を表す動詞や，出来事の「進展」を表す「～ていく」，もしくは「出来事の成り行きの結果」に焦点を置いた「～ことになる」，「至る」（cf.「些細なことから離婚に至る」）などが観察される。これらの表現は，それぞれの仕方でXとpの間に「他性」を導入していると考えられる。

8　但し，「予想がつく」が用いられると「で」が使えるように思われる（cf.「隣の部屋の人物が誰なのか，甲高い声で予想がついた。」）。それは，「～がつく」がつくことによって，「隣の部屋の人物が花子である」ことが予想の形であるにしても「結論づけ」として捉えられるため，Xを，それを確定する「媒介」（＝根拠）として解釈できるようになるためであると考えられる。

9　つまり，「Xで」がpの「特定化」を表す場合，Xは，それと競合する要素X′，X″…を含むクラスから，pの実現にふさわしいものとして「選択」されたものであるということである。

10　このケースは，Xが「材料」と解釈されるケースと類似しているが，Yが「全体」として把握されるという点で前者と異なる。

11　ここでは，「完結」の意味を「それ自体まとまったものとして存在できていること」（『大辞林』）と解釈する。

12　日文研（2009：30）は「動きの主体」を，「時間の流れの中で，何かが起きたり，何かが変わったりする動きを引き起こす存在としての主体である。動きは動詞述語によって表される。」と定義する。

13　また，この用法において，「で」と共起する動詞はしばしば「ておく」などの「処理」を意味する表現が付加されて現れるが，このことは「で」により，pがその「完結性」（cf.「事態の実現」）の観点から捉えられるということと無関係ではないと思われる。

14　ただし，これらの例においては事象の「連鎖」という側面は不在であると言わねばならない。

15　「自分で」が「言い出す」ではなく，「水泳教室に通う」をスコープとして持つ場合は可能であるように思われる。（cf. 今まで親に送迎してもらっていたが，これからは自分で通う）

参考文献

Ashino, F., J.-J. Franckel, & D. Paillard (2017): *Prépositions et rection verbale, Étude des*

prépositions avec, contre, en, pour, parmi, pour, Bruxelles : Peter Lang.
Camus, R. (éd.) (2019) : *L'information grammaticale,* l'actualité de la théorie d'Antoine Culioli, 162, Peeters.
Culioli, A. (1990, 1999a, 1999b, 2018) : *Pour une linguistique de l'énonciation,* tomes 1-4. Ophrys, Lambert-Lucas.
Franckel, J-J. & D. Paillard (2007) : *Grammaire des prépositions*, tome1, Ophrys.
芦野文武・伊藤達也（2019）:「現代日本語における格助詞「で」の多義性の理解に向けて」,『言語・文化・コミュニケーション』, 51, 慶應義塾大学・日吉紀要, p.105-124.
菅井三実（1997）:「格助詞『で』の意味特性に関する一考察」,『名古屋大学文学部研究論集』, 127, p. 23-40.
菅井三実（2004）:「格の体系的意味分析と分節機能」,『認知言語学論考』, 4, ひつじ書房, p.95-131.
菅井三実（2007）:「現代日本語における奪格の意味記述」,『兵庫教育大学研究紀要』, 30, 兵庫教育大学研究推進委員会, p. 49-58.
菅井三実（2008）:「現代日本語の格体系から見た原因NPの格標示について」,『言語表現研究』, 24, 兵庫教育大学言語表現学会, p. 1-11.
宗田安巳（1992）:「原因理由の「で」と「に」の格らしさについて」,『日本語・日本文化研究』, 18, 大阪外国語大学日本語学科（編）, p. 67-86.
宗田安巳（1993）:「原因・理由の「から」―格助詞と接続助詞の相関関係」,『日本語・日本文化研究』, 19, 大阪外国語大学日本語学科（編）, p. 57-75.
宗田安巳（2006）:「「で」の「格解釈のゆれ」再考―「道具」と「原因・理由」を中心に―」, 上田功・野田尚史編『言外と言内の交流分野：小泉保博士傘寿記念論文集』, 大学書林, p. 323-333.
日本語記述文法研究会（編）（2009）:『現代日本語文法2』, くろしお出版.
盤若洋子（2015）:『格助詞「で」の研究―深層格と包括的意味機能―』, 拓殖大学大学院言語教育研究科言語教育学専攻, 博士論文.
益岡隆志・田窪行則（1992）:『基礎日本語文法―改訂版―』, くろしお出版.
間渕洋子（2000）:「格助詞「で」の意味拡張に関する一考察」,『国語学』, 国語学会, p.15-30.
森田良行（1989）:『基礎日本語辞典』, 角川書店.
森山新（2008）:『認知言語学から見た日本語格助詞の意味構造と習得』, ひつじ書房.
山田敏弘（2003）:「起因を表す格助詞「に」「で」「から」」,『岐阜大学国語国文学』, 30, p.13-23.
渡辺義夫（1983）:「カラ格の名詞と動詞のくみあわせ」, 言語学研究会（編）,『日本語文法・連語論（資料編）』, むぎ書房, p.353-425.